

～発災から1年、今も続く災害支援の現場から～



昨年6月18日、大阪府北部を震源とするマグニチュード6.1の地震が発生。北摂地域を中心に震度5強から6弱の揺れを観測し、家屋の損壊やガスの供給停止、断水などが起こりました。これを受け府内の市町村社会福祉協議会(以下、社協)では、被害の大きかった7市で災害ボランティアセンター(以下、災害VC)が設置されました。

○茨木市をベース(拠点)として現在も活動を継続



大阪北部地震の被災地では、屋根瓦が落ち雨漏りが生じたことによるブルーシート張りの依頼が災害VCへ多く入りまし

た。高所の作業であるため、社協や一般ボランティアでは対応できないという課題がありました。中島さんたちは、地震発災後いち早く茨木市社協災害VCを訪れ、茨木をベースに災害支援活動を開始しました。

さらにSNSで、これまでの災害支援に関わりのあった技術系ボランティアに連絡をとり、全国各地で災害支援活動を行っている仲間たちが茨木へ集まりました。

茨木市には、地震発災の直後から現地にかけつけ、被災地の一日も早い復興・生活再建をお手伝いしたいとの思いから、今もボランティア活動を続けている方がいます。

今回は、その一人「災害救援レスキューアシスト」代表の中島武志さんに話をお聞きしました。(6ページへ)

◆災害救援レスキューアシストとは？

災害発生後24時間から72時間以内の被災地入りを目指し、要配慮者を中心とした被災者への迅速な救援活動を行っています。

普段の活動では、防災・減災のための研修会や、ブルーシート張りの勉強会などを開催しています。

◆災害ボランティアセンターとは？

大規模な災害が発生した時に、ボランティア活動を円滑に進めるための拠点として設置されます。役割として：

- ①被災者とボランティアをつなぐ
- ②ボランティアのチカラで生活再建をめざす
- ③ボランティア活動の安心・安全な環境整備
- ④関係団体との協働による災害支援活動

などがあります。



「自分の目で現場を見ることが大切」と話す中島武志さん

被災者の数だけ悩みがある

大阪北部地震や9月に発生した台風21号で被災した家の多くは、一部損壊といった状況。被害は外から見えづらく、被害状況を把握するには人も時間も要しました。

また、その後も日本各地で災害が起こり、世間からは関心が薄れてしまう災害となりました。

しかし、被害の大小に関わらず100人の被災者がいれば100通りの悩みがあります。

例えば、屋根が壊れたことによる生活への影響は大きいもので、一度張ったブルーシートが台風の影響ではがれてしまい、パタパタと揺れる音が近所迷惑になると憂慮し、再度修繕の依頼に来た方もいました。

また、足腰が弱いためバケツを何度も交換することができず、雨漏りのたびにカビだらけの布団を敷き、バケツ代わりになっていた住民もいました。その方から「雨が降るたびに泣いてしまう」との声を聞き、支援には一時的なニーズだけでなく、被災者一人ひとりの生活に寄り添うことが大切であると改めて実感しました。

「減災」の大切さ

被災者からは「まさか自分が...」という声をよく聞きます。災害はいつどこで起こるかわかりません。「今、災害が発生したら...。電話やインターネットが使えなかつたら...。」

そのためにも、常にもしものことを想定し、家族や職場への連絡方法の確認や、家具を固定して転倒防止の対策をとることが必要です。一人ひとりが日頃から災害に備えることが減災となり、少しでも多くの命を救うことにつながります。

目頃からの関係づくりで 受援力高めて

茨木市社協災害VCでは、ボランティア活動に入る前には必ず依頼者宅を社協職員と一緒に訪問し、家のようすや依頼者の状況を確認しました。依頼者の中には、日頃から何らかの福祉ニーズを抱えていることが少なくありません。単に災害で生じたニーズを解決するのではなく、今後の生活再建のために社協ワーカーが依頼者と関わる必要があります。そのためにも、災害時には普段から関係性のある地元社協ワーカーが地域に出ることが求められます。

いざ災害が起こると、災害対応と通常の運営業務双方に追われてしまう現状があります。

社協が担う災害VCのあり方としては、日頃から近隣社協や多機関と顔の見える関係をつくり、訓練等とおして災害時に助けを求められることができる『受援力』を培うことが必要です。

今後の活動について 「まずは知ってもらいたい」

茨木市社協と協力をして、地元の市民向けに災害ボランティアの初級講座や、重機ボランティアに興味のある方へ



活動前、円陣を組んで安全確認を行います

の研修等を実施、災害時に地元住民が支え合える仕組みづくりを目指しています。また、災害時に地元の若者がボランティア活動に取り組めるよう、学校ともつながっていければと思っています。

一方、地域で困りごとを抱えている住民への継続的な支援には、民生委員や福祉委員の協力が不可欠です。

日頃から地域を支えているみなさんに私たちの活動を知ってもらい、災害時に連携できる関係性を築いていきたいです。

ボランティア 募集しています！

詳しくはこちら



TEL: 070-3149-6333
地震や台風の被害によるお困りごとの相談

災害支援からうまれた「わ」

豊中市

社協×施設で災害支援

豊中市社会福祉施設連絡会（以下、施設連）では、これまで高齢、障がい、保育・児童分野等の社会福祉施設が「よこ」の連携を育みながら、施設間での情報共有や関係構築を図ってきました。この顔の見える関係が大阪府北部地震や台風21号被害においても「社協×施設」の災害支援活動として展開されました。

”施設の機能”生かした被災者支援

自分たちの施設では何ができるのか。北部地震により電気やガス等のライフラインがストップした地域では、近隣に水や非常食を配布したほか、施設を開放して乳児の沐浴や洗濯機の使用、携帯の充電など施設機能を生かしてさまざまな支援を行いました。

施設連のネットワークがあることで、施設間の合意形成が図りやすく、自施設でできない対応を他施設につなげるなど、その時々で支援の幅が広がりました。その経験から、台風21号の被災時は施設ができる災害支援をまとめた「被災者応援リスト」を社協のHPに公開しました。

平時の取り組みが 災害時の支援ベースに

施設連では、豊中市社協が市内7つの日常生活圏域エリアで開催する「地域福祉ネットワーク会議」にも積極的に参画しています。施設連として参画することで、福祉委員、民生委員、NPO、行政などさまざまなつながりを生むだけでなく、住民の皆さんから「地域に開かれた施設」と認知される



ようになつてきました。施設連の安家比呂志会長は、「施設は地域力を高め、地域と共存する関係であるべき」と強調します。住民目線で話を聞く機会は

地域課題やニーズを具体的に知ることにもつながり、平常時にも災害時にも生かされています。

災害に強いまちづくりを

「施設の取り組みをより多くの方に知ってもらうため、紙媒体だけでなく、HPを活用して『施設の地域貢献活動の見える化、見せる化』を進めたい」と事務局（豊中市社協）の古川洋平さん。施設と住民をつなぐツールとしてH29年に作成した「地域貢献活動協力リスト」に災害時の支援情報を追加し、より幅広い世代へ周知を図っていく考えです。

さらに、安家さんは、「顔の見える関係を続けることが地域福祉を支え、災害に強いまちづくりにつながる。これからは多くの住民の皆さんとの接点をもちながら（連絡会として）有機的に機能したい」と意気込みを語りました。



会長の安家比呂志さん:左(あけぼの会)と副会長の鍋島康秀さん:右(和)※0は法人名

岸和田市



府内初！移動型災害VC

昨年の台風21号により、岸和田市では家屋の一部損壊3,400軒、最大停電件数50,500世帯など、これまでに経験したことのないような被害を受けました。市社協では、災害VCを発生から3日後に立ちあげ、被災された方の支援にあたりました。

だんじり祭りにより災害VCの建物閉館となるため、市内8カ所で「移動型災害VC」を設置。デイサービス等の福祉施設を拠点にサテライトとして機能を発揮し、住民により身近な場所で活動を行いました。

さらに、祭り開催中は、休憩処を設け、気軽に相談できる環境を整えることで、ニーズの掘り起しにつながりました。



休憩処の様子

自主防災会と祭礼団体のタッグ

市内の別所町では、地域に身近な青年団を中心とした祭礼団体が訪問活動を行うことで、なかなか声があげられない方でも安心して相談することができました。

ニーズの内容によっては、災害Vと調整し、技術系Vと連携するなどの活動を行いました。そこから、福祉委員や民生委員の見守りにつながった方や地域の支え合いが必要だと、新たに町会に加入された方もいます。

”ネットワーク”を広げたい



自主防災会の呼びかけによる青年団活動の様子

市社協では、迅速な被災状況の把握や住民の困りごとをすいあげるしくみづくりの重要性を改めて感じています。市社協の川村勝^{まさむね}さんは、「平常時から組織内部で災害対応への備えやアウトリーチの重要性を共有し、関係機関（福祉委員・民生委員・町会・自主防災会など）との連携を一層深めていきたい。今回、技術系Vとつながったことはとても大きいこと。これからも多様なネットワークを広げていきたい」と抱負を語りました。

地域で活躍する

民生委員・児童委員さん

Vol.26



枚方市開成校区
板床 美栄さん
(民生委員・児童委員歴40年)

家族や民生委員仲間には、感謝の気もちでいっぱいです。

● 次世代に引き継ぎたい“思い” ●

40年間貫いた思いは、「誰にでも隔たりなく、優しい心で寄り添う」こと。今年の11月に定年を迎えますが、この思いはしっかりと後任の方に引き継いでいきたいです。

しんどいこともありましたが、民生委員をしていなかったら、おもしろみのない人生だったかもしれません。民生委員として活動する中で、多くの人と出会い、さまざまな考え方を学びました。

定年を前に、改めて民生委員として駆け抜けた40年はとても彩り豊かなものであったと感じています。

Q 質問数珠つなぎ A

Vol.25 浦野さんから質問

民生委員の担い手確保のために取り組んでいることはありますか。

このコラムでは、地域で活躍する民生委員・児童委員(以下、民生委員)さんにスポットを当て、その方の思いを紹介します。

今回は、優しい笑顔が印象的な板床さんにインタビュー。民生委員として昭和から平成、令和を駆け抜けた40年を振り返っていただきました。

● 「あなたがいてくれて良かった」 ●

民生委員として活動をはじめたのは、30代の頃。当時はまだ、方面委員時代から活動されている大先輩もおられました。右も左もわからず、目の前の課題をこなすことに必死でしたが、地域の方から「あなたがいてくれて良かった」「ありがとう」との言葉をかけられた時には、心が救われる思いがしました。

● 抱え込まず、助けられ上手に ●

一人で抱え込まないことが、活動を続ける秘訣です。大切なのは、困っている方にさまざまな支援の手が行き届くこと。私たちの役割は、その橋渡しをすることだと思っています。

加えて、家族の応援や仲間同士のつながりがあったからこそ、長年続けてこられました。

自治会や地区福祉委員会などの地域活動を通じて色々な方とつながりを持ち、民生委員にふさわしい人を探しています。